

エマスの詩—エッセイの巻頭詩について—

Emerson's Poems: Mottoes to His Own Essays

小 田 敦 子

(Atsuko Oda)

Ralph Waldo Emerson(1803-82)は *The Conduct of Life*(1860)までのエッセイの殆どすべてにおいて、自作の詩をモットー(巻頭の題辞)として使った。 *Essays, First Series* (1841)では自作の題辞は3編(“History”に2編、“Self-Reliance”に1編)であったが、 *Essays, Second Series* (1844)では引用が“Manners”の Ben Jonson のみになった。1846年にエマスンは初めての詩集 *Poems* を出版、1847年の *First Series* の改訂版では、『コーラン』の引用を付された“Love”以外は、“Self-Reliance”の Beaumont・Fletcher をはじめ、“Heroism”のマホメットと“The Over-Soul”の Henry More のように引用を残したエッセイも含めてすべてに、自作の詩を題辞としてつけた。この変更はエマスの代表作 *Nature* にも及ぶ。1836年版では、「自然は知恵の似姿または模倣、魂が最後に取りの形にすぎない。自然はただ行為するだけで、知ることはないもの」というネオ・プラトニスト、プロティノスの句が引かれていたのに対し、1849年に *Nature, Addresses, and Lectures* という形で出版されたときには、以下のような自作の詩に変えられた。¹

A subtle chain of countless rings
The next unto the farthest brings;

The eye reads omens when it goes,
And speaks all languages the rose;
And, striving to be man, the worm
Mounts through all the spires of form.

このモットーは、これから *Nature* を読もうという読者には、特に現代の読者にとっては、グロテスクで意味不明の子供じみた謎かけ、悪い冗談のような題辞としか思えないだろう。しかし、エマスの同時代人には意味のある、*Nature* の本質をよく語る題辞であった可能性はある。この題辞は、David Robinson がエマスの生涯の転換点になったと指摘した 1833 年のパリ植物園の大標本室での体験を直接伝えるものであり、7月13日の日記の以下のような記述を要約している。

The Universe is a more amazing puzzle than ever as you glance along this bewildering series of animated forms... & the upheaving principle of life everywhere incipient in the very rock aping organized forms. Not a form so grotesque, so savage, nor so beautiful but is an expression of some property inherent in man the observer—an occult relation between the very scorpions and man. I feel the centipede in me—cayman, carp, eagle, & fox. I am moved by strange sympathies, I say continually “I will be a naturalist.” (*JMN*, IV:199-200)²

爬虫類と人間との「神秘的な関係」と呼ばれるこのような感覚は、脳科学の知見に慣れた現代人にも親しいものであるが、19世紀における「博物学者」の意味には、より精神的な価値が含まれていたという。博物学者とは、エマスの場合のように、霊的な真実は、奇跡や超自然的な啓示からでは

なく、自然に由来するということが、宇宙の秩序から個人や文化の倫理の進化まですべてのことが、大雑把に解釈されていた自然を精密に研究することで発見できるということを感じる人という意味でもあった。³ エマスンが講演者としてはじめて行った講演は、このヨーロッパ旅行から帰国後すぐにボストン博物学研究会の依頼を受けて行ったもので、演題は“*The Uses of Natural History*”であった。⁴ パリ植物園での体験が講演から *Nature* へと発展していった。

Nature の初版にエマスンが選んだプロティノスの句は、自然を利用することで人間の精神の働きを知ることができるかと考えるエマスンにとって妥当な選択であった。それを自作の詩に変えたとき、*Nature* を読み、“*The Method of Nature*”(1841) の講演を聞き、とエマスンの思想を忠実に追っている同時代人には、エマスンの題辞は本論の象徴としての機能を果たしていたと想像できる。しかし多くの読者には抽象的な命題であるプロティノスの引用の方が、過剰な自然の営みが描写されるばかりのエマスンの題辞よりも本論の理解を助けただろう。エマスンの題辞とはいったい何なのか、何を目指しているのかを以下に考えてみたい。

*

モットーやエピグラフは、本来、過去の権威あるテキストから引用されるものであり、その短い一節のなかに含意まではともかく先ずは意味を見出すことのできるものであるべきで、エマスンの自作の詩を用い、その上、時には2ページにわたる長い詩を巻頭に置くというやり方は明らかな型破りである。エマスンの詩を取り上げる数少ない論者の一人、Saundra Morris は、エマスンが意図的に文学の型に反対し、題辞のへつらうような、自作から読者をそらすような傾向に抵抗していることを、以下のような引用に関するエマスンの意見を引きながら、指摘している。⁵

Quotation confesses inferiority. In opening a new book we often discover, from the unguarded devotion with which the writer gives his motto or text, all we have to expect from him. If Lord Bacon appears already in the preface, I go and read the "Instauration" instead of the new book. (W8:188)

I hate quotation. Tell me what you know. (May 1949; JMN II: 110)

「同族の相似た魂」という問題はまた別にして、先人の権威、ヨーロッパの権威にすぎるとは、「The American Scholar」(1837)、「Self-Reliance」をはじめ、多くのエッセイ、講演のなかで、エマスンがアメリカの未熟さの現れとして否定してきたことだ。自己信頼という観点から、他者の権威に頼る引用に抵抗するというのとは一つの理由になるだろう。「Self-Reliance」の中でも、自分の考えを言えずにいると、それを他人から聞くことになり自分を恥じることになると言っている。

しかし、それと同じ段落でエマスンは、「相似た魂」という問題にも関わるとは、他人の意見がもつ権威の魅力にも言及している。

In every work of genius we recognize our own rejected thoughts: they come back to us with a certain alienated majesty. (121)

「天才」の作品によって、自分の考えを立派なものとして見出すということには、思いが通じる、共有されることが人にもたらす喜びという魅力があるだろう。エマスンは「Quotation and Originality」(1868)の中で、天才が持つ独自性について、「Original power is usually accompanied with assimilating power,」(325)と逆説的な言い方をする。最初によい文を発し

た人の次に、それを最初に引用する人が出る。「天才は、高貴に借用する。」そして、高貴な真実であればあるほど、それは個人の宝ではなく、人類の宝になるので、著者が誰かは問題でなくなると、エマソンは考える。古代神話の詩はそうして人々の「言語」になった。エマソンの無署名の詩は、そのような古代神話的な民族共通の宝という権威を追及しているのではないだろうか。

エマソンの題辞はエッセイの読者に殆ど読まれていないという点では題辞として機能していないかもしれないが、読者は巻頭に置かれた長詩に気づかないわけにはいかない。Morris はそれをエッセイの入口に置かれたスフィンクスの謎のようなものと言う。エマソンの題辞は人間の魂の秘密に関わる謎を提示する神託的なものであり、その意味では、聖典に類する性質を持ち、後に続くエッセイは「最初の詩的な『聖句』の複雑化であり、応用であり、『聖書釈義』である」(240)という Morris の捉え方を拙論も大枠として支持する。Harold Bloom はエマソンはアメリカの宗教をキリスト教から “self-reliance” に変えたと極論したが、⁶ 確かに、エマソン自身がエッセイの題辞の権威に託したものは、新しい国、新しい時代の聖典であり、アメリカの天才が発する、神の言葉に変わって人々を「同化する力」のある言葉の模索であったように思われる。前述のように、科学に関する講演を始めたエマソンは科学者の考え方や現代における科学の意味に大いに興味を持ち、1793年に Thomas Paine が、「科学は真の神学である」と言ったことや、ペーコンの「人間は自然の説教者であり解釈者である」という言葉について考えていたことも、⁷ 新しい時代の聖典を書くこと、或いは最初に引用することへのエマソンの意欲を語るものだ。エマソンの題辞には現代の聖典を書くのだという意図が潜んでいる。

*

エマソンの題辞のうち比較的言及されるのは前出の *Nature* や

“Experience”など限られたものであり、最近 “Illusion”がよく詩選集に取り上げられるようになったというが、⁸ 題辞という問題とは別に、エマスの詩というものが、まず、取り上げられることが少ない。しかし、エマス自身にとっては、詩は非常に大きな意味を持つ。彼は生涯に亘って詩を書き続けた。*The Poetry Notebooks of Ralph Waldo Emerson*の編者は、エマスの詩が研究対象になってこなかった主な理由として、同じ詩にエマスが手を入れ続けた結果、決定稿が無いことをあげている。⁹ エマスは1835年に婚約者に宛てた手紙で “I am born a poet, of a low class without doubt yet a poet. That is my nature and vocation.”と自身を定義しているが、¹⁰ その30年近く後、1862年の日記にも同様の認識を “I am a bard least of bards.”で始まる一節に書き留めている。¹¹ 詩人を “bard”とも呼んでいることが示すように、エマスは洗練されたイギリスの詩人よりも、「言葉がもの」である原始的な自然の言葉で「広大なもの、理想的なもの」を歌った古代ケルトの詩人に詩人の本性と職業の理想と原型を見ていた。¹² これは博物学者になるという決意と同じ関心である。ケルトの吟遊詩人 Merlinを表題にした詩をエマスは3編発表した。そのうちのひとつ、“Merlin I”は自然という本を読み解く詩人の役割を力強く擁護する。古代詩人の仮面をつけたエマスが、詩の主題と形式について理想の形を謳うのだが、まず、主題については以下のように定義する。

The kingly bard

Must smite the chords rudely and hard,

As with hammer or with mace;

That they may render back

Artful thunder, which conveys

Secrets of the solar track,

Sparks of the supersolar blaze.

Merlin's blows are strokes of fate,

Chiming with the forest tone

When boughs buffet boughs in the wood; (ll.9-18)¹³

宮廷詩人と対照的に、自らの手で自然を相手に働き、自然の力、運命の力を良くも悪くも受け、しかしそれに人間の力を加えて押し返す、それが詩人の表現だという。木と共に暮し、木を切り倒し生活し、町を創っていくという古代世界のイメージは、西部開拓が続く 19 世紀アメリカにとって遠い世界の話ではない。また、ウォールデンの森の大枝が風に揺すられ轟音をたてる情景は、日々エマスを魅するものであった。彼は“Woodnotes”という題でも 2 編の詩を発表している。ニューイングランドの松の鳴る音に、エマスは先住民の時代からの土地の声、土地の霊 (*genius loci*) の声を聞き、古代吟遊詩人のようにアメリカで最初の詩人としてその土地の神話を表現しようとした。¹⁴

最初にあげた *Nature* の題辞にもあった“omen”という言葉が暗示するように、彼にとって、詩人は、先ず、自然の緻密な観察者であり、それを誰よりも早く伝えるという点では、預言者でなければならない。エマスの娘 Ellen と友人 Cabot によって編集されたエッセイ“Poetry and Imagination”の基になった 1854 年の講演、“Poetry and English Poetry”の中でも、エマスは詩の最良の定義として神託の定義、“the Chaldaean Oracles”、つまり、ゾロアスターの言葉として紹介された以下のものをあげた。

“Poets are standing transporters, whose employment consists in speaking to the Father and to Matter; in producing apparent

imitations of unapparent Natures, and inscribing things unapparent in the apparent fabrication of the world.” (LL, 298)¹⁵

“the Father”は「精神」と言い換えることができるだろう。ここには *Nature* の二項対立、魂と自然があり、エマソンは精神の優位を繰り返し主張し、自身を観念論者と考えているが、この対立が一元論なのか二元論なのかは、彼自身にとっても容易に結論の出ない問題である。そのため何が精神で何が物質なのかを問いかけ、前者を体現する自然を検証し、隠れた精神を目に見える自然で表現すること、世界創造の秘密を明かすのが詩人の務めだと言う。それは博物学者の自然観察と同じ性質を持つが、詩はエマソンにとって第一義的に世界創造の秘密を語る神託なのだ。

神託ならばますますわからなくて当然だが、詩はわからないと人々が考えることを先制して、エマソンは詩が嫌いだと言う人も、実は好きで、詩人の言葉を我知らず使っているのだということをししばしば指摘している。この講演の中でも、エマソンはニュートンの物理法則から話を始めて、詩の普遍性は物質でできている人間が宇宙の物理法則を気づかずに受け入れているのと同じようなものだと説明する。

All this, because Poetry is science, is the breath of the same Spirit by which nature lives, and the Poet is a better logician than the analyzer. For a wise surrender to the currents of nature, a noble passion which will not let us halt, but hurries us into the stream of things, makes us truly know. Passion is logical.... (LL, 304)

詩人は日常感覚の裏に潜む自然の論理、或いは、“the method of nature” (LL, 305)を発見しそれに従うことで、限られた社会常識の言葉ではなく、

精神を語りうる普遍性を持つ自然言語を獲得するとエマソンは考える。それがエマソンの「博物学者になる」、或いは、「詩は科学である」と言う意味だが、*Nature* の題辞のグロテスクな即物性が自然の過剰さを強調し、プロティノスの精神偏重より、自然重視の印象を与えたと同様に、上の引用でも、聖書的な表現が科学的な言葉と混合した結果、過剰な自然性を生み出している。詩は「息」の聖書的な意味である神に由来する「生命」を語るものだと言っているのだが、自然の流れに「ゆだねること」、「ものの流れ」へと人を促す「情熱」という表現が暗示するような人間の受動性への認識は、物理的な自然の一部として呼吸する身体である人間の姿をより強調する。そして、「博物学者」エマソンが考える精神を表現するための手段である自然という調和した比喻を崩す契機を孕んでいる。

先に引用した“Merlin I”の中の「マーリンの吹く風は運命の一撃 / 木々の大枝と大枝が打ち合うときの / 森の音と一致する」という行は、今述べたような自然の流れに我が身をゆだね、風の音に同化して自然の力、或いは、運命の力を知る詩人の想像力に言及している。実際の木の音に強い印象を受けたエマソンは、それをマーリンが語るべき言葉だと想像する。マーリンの詩は「運命の一撃」であるという言い方には、後にエッセイ“Fate”で敷衍される運命・自然と人間の自由との相互の関係性、詩人は運命に打たれると同時に、鮮やかな筆捌きで言葉を書き出すことでそれを押し返す、そのような自然に対する受動性とそれに対抗する意志の力の発現とを表わしている。人に印象を与えるものが人を表現するものでありうる調和の瞬間があるが、それは瞬間であって常にあるものではないということも“Merlin I”のもう一つの主題であるが、それも自然の法に従っている人間の運命の一つの表れと言える。

エマソンの詩は博物学者の詩であり、新しい詩語を探している。マーリンの詩の形式は、古代の詩のように単純で堂々としたものであるべき

で、英詩の洗練された定型には従わず、「自分の韻律」を求める。

Great is the art,
Great be the manners, of the bard.
He shall not his brain encumber
With the coil of rhythm and number;
But, leaving rule and pale forethought,
He shall aye climb
For his rhyme. (ll.27-33)

詩をつくるのは韻律ではなく、思考がつくるリズム、“meter-making argument”(186)であるというのが、エッセイ “The Poet”の画期的な提言であった。ここでもそれが繰り返されるとともに、この後、詩は天使にせかされる詩人の姿を描いて、自然の流れは気まぐれな急流で、そこに身をゆだねて自分の思考のリズムを見つけるのは難しいことが繰り返し暗示される。科学の普遍性をめざしたエマスの創造する自然の言語は、講演者であったことも相俟って誰にもわかる言葉で語ろうとした結果、時には Blake 的な子供っぽいイメージの言語として表れる。また一方では、文語から口語的なリズムへ舵をきり、口語自由詩へ向かう道を開いたという面もある。

“Merlin II”は、エマスの考える詩人を典型的に描き出した、詩についての詩である。そこで明らかなように、エマスにとって、詩の本質は自然の印象を普遍化すること、自然の理法を人々が使う言語のロジックにすることにある。

*

エマスは題辞のうち 13 編を *May-Day and Other Pieces*(1867)に収

め、それらを“Elements”というカテゴリーで括った。*Selected Poems* (1876)ではそのうち7編が選ばれ、他の詩と並列する形で収められた。Centenary Editionの編者であるエマスの息子、Edwardは他の題辞を加えたが、“Elements and Mottoes”という題にすることでその区別を残した。“Elements”という言葉は、エッセイ作品の構成要素である題辞の集まりという意味で使われているのであろうが、言葉の起源やギリシア哲学に関心を持っていたエマスは、それを第一の原則や基本物質というような世界の原理に言及する言葉として意識し、彼自身の詩、或いは作品の根本的な要素を示す含意をこめていたのではないだろうか。

13編の題辞を概観すると、幾つかの共通性がわかる。“Experience”は“lords of life”の行列の流れに、「自然」に手を引かれた「小さな人」が巻き込まれながら共に進んでいる様子を描く。これは非常にわかりにくい詩だが、人間の意識に働く力の擬人化という点では、“tyrants of his doom”の仕業を描く“Manners”と共通性がある。“Manners”は本来“Behavior”の題辞であったものだが、「気品」、「美」、「気まぐれ」が人間の運命を支配する様を、恋に悩む人姿を例に描写する。運命とそれに対峙する人間という主題は多く、“Heroism”は英雄とは逆境を生きる者だということを警句的に述べる。“Worship”は運命に傷ついた人間が、反対に、その運命によって力を得る例を列挙し、運命への考え方を逆転させている。難を受ける人間の姿にも弱い存在としての人間を含意するのはあるが、人間を弱い子供として提示する方法は、“Experience”の他、2編の詩から成る“Compensation”のIIにも見られる。そしてその非力を恐れる子供は「自然」を支配する力が調和的に働くことを諭され慰められるが、“Compensation”のIは、地球に働く「償い」の原理を宇宙の視点から見たものだ。

人間の受難、不幸を償う力が自然には働いているという思想は、殆ど

の詩に共通すると言える。“Spiritual Laws”は天上の力が人間の朽ちていく時間を反動させる力として働くことを告げる。“Unity”はエッセイ“The Over-Soul”のモットーが改題されたもので、世界にはすべてを一つにしようとする力が働いていることを格言的に述べる。人格者の精神が自然に勝ることを神話的に語る“Character”は、天上の力が人間に宿る例であるし、世界を美しいものに変える友人への賛歌である“Friendship”も同じだ。「半神」である人間が持つべき教養である音楽や自然や人間への感受性の獲得を予言的に語る“Culture”は、その力を感受するために必要な教養を説いたものだし、“Art”はその力の発現である「ロマンスの輝き」を日常に与える芸術の特権を歌う。“Beauty”は自然の中を移ろう美を生命の本質として追いかけたペルシア詩人を描くが、それはまさに天上的な力を追い求める物語だ。“Politics”の同種のものが同種のもを生むという「賢いマーリンがほのめかし / 偉大なナポレオンが証明した」(199)格言も、国や教会が欲得を離れた畑や家庭であることを理想だと言う論理も、物質と精神との対比の上に、精神の優位を掲げるものだ。

つまり、エマスの題辞は、物質と精神から成る世界において精神の優位を擁護することを表明したものと言うことができる。それはまさにエマスが詩人の役割、宗教に代わる詩の役割として考えていたことだ。“Art”の最後の部分も、そのような詩(芸術)の役割を語っている。¹⁶

'T is the privilege of Art
Thus to play its cheerful part,
Man on earth to acclimate,
And bend the exile to his fate,
And, moulded of one element
With the days and firmament,

Teach him on these as stairs to climb,
And live on even terms with Time;
Whilst upper life the slender rill
Of human sense doth overflow. (ll.19-28)

元来、人は自然の中でも天上的なものと同じ要素でできているのだが、流刑者のように地球に置かれている。地上的なもの、つまり、運命や時間に耐えて行けるのは、天上的な生命がかろうじて人間の感覚に届いているからで、その生命を伝えるのが芸術なのだと言う。この考えは芸術の意義としてごく真つ当な普通に受け入れられているものであるが、エマスンの問題、斬新なところは詩の最後の2行である。

異端的な思想で大問題になった“The Divinity School Address”(1838)以前から宗教に関する一連の講演があり、その最初のもの、1837年の講演“Religion”でエマスは最も過激な発言をしていると Lawrence Buell は指摘している。宗教の本質は『神の精神』が私たちの精神に流入すること」にあり、その約束が「すべての個々人の内にある、人間の魂の一体性」なのだ。それがあらゆる宗教の核心であり、「法の中の法である。聖書、シャーストラ、ゼンド・アヴェスタ、オルフェウス教の詩、コーラン、孔子」、皆そうだとエマスは言った。¹⁷ エマスの題辞は、アメリカの新しい神話、宗教として、誰の内にもある天上的な生命への信頼を呼び起こそうとするのだ。

題辞ではそのような詩人の役割が芸術として語られたり、詩人や友人、半神の姿に託されたり、自然に働く「力」の感受として描かれたり、様々な角度から表現されている。同じことを様々な言い換えて何か読者に説得力のある比喩を見つけようとしている。詩人像にしても、セイド（サーディ）、マーリン、オルフェウスなど様々な人物に仮託して語ることに

は、前述の「独自の力は人を同化する力を伴う」という考えに関わる。人は自分の考えを他人から聞くと納得するように、自分の文章を想像上の人物に語らせることで、言葉の力を強めることができるとエマソンは言う。“Many men can write better under a mask than for themselves.”(327)という考えは、「行間を読む」という慣用句をエマソンがパラフレーズした、“wit was what you heard, not in what the speakers said.”(327)という考え方にもつながる。これらの現象は、エマソンにとって「人間の魂の一体性」の存在を証明するものだ。初期の宗教に関する講演で猛反発を受けたエマソンは、遠回りな方法で、しかし、自身の考えを強めていく方法で創作を続けた。言いたいことは「精神の無限性」一つなのだが、その普遍性を自身に、そして他者に問いかけ続けていることを、題辞の様々な比喩は語っている。

エマソンの題辞は、人々に共通する内なる力を呼び起こす共通言語である「詩」というものがエマソンの個々のエッセイの、そして、すべての作品の第一の要素“element”であり、詩は詩人だけのものではなく、すべての人間を構成する要素なのだということを、繰り返し思い出させようとする。題辞は本文のアブストラクトであることよりも、詩というものが存在することを伝えることが重要なのだ。

註

¹ エマソンのエッセイのページ数については、他に指示がない場合は、*Emerson's Prose and Poetry* (Norton Critical Edition, 2001)による。

² Emerson, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson, Volume IV, 1832-1834*, ed. Alfred R. Ferguson (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1964), pp. 199-200.

³ Ronald Bosco, “Ralph Waldo Emerson, 1803-1882: A Brief Biography,” *A Historical Guide to Ralph Waldo Emerson*, ed. Joel Myerson (New York: Oxford UP, 2000), pp. 22-23.

⁴ Robert D. Richardson Jr., *Emerson: The Mind on Fire* (Berkeley: U of California P, 1995), p. 154.

⁵ Sandra Morris, “‘Metre-Making’ Arguments: Emerson’s Poems,” *The Cambridge Companion to Ralph Waldo Emerson*, eds. Joel Porte & Sandra Morris

(Cambridge: Cambridge UP, 1999), p. 237.

⁶ Harold Bloom, *Agon: Towards a Theory of Revisionism* (New York: Oxford UP, 1982), pp.145-178.

⁷ Richardson Jr., p. 153.

⁸ Morris, p. 239.

⁹ Emerson, *The Poetry Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, eds. Ralph H. Orth, Albert J. von Frank, Linda Allardt, & David W. Hill (Columbia: U of Missouri P, 1986), pp. xi-xii.

¹⁰ Emerson, *The Letters of Ralph Waldo Emerson, Volume I, 1813-35*, ed. Ralph L. Rusk (New York: Columbia UP, 1939), p. 435.

¹¹ Emerson, *Selections from Ralph Waldo Emerson: An Organic Anthology*, ed. Stephen E. Whicher (Boston: Houghton Mifflin, 1957), p. 407.

¹² Emerson, "Poetry and Imagination," *Letters and Social Aims*, Vol.8 of *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, Centenary Edition, ed. Edward Waldo Emerson (Boston and New York: Houghton Mifflin, 1904), p. 57.

¹³ エマソンの詩の引用は、*Ralph Waldo Emerson: Collected Poems and Translations*, eds. Harold Bloom and Paul Kane (New York: The Library of America, 1994)による。"Merlin I", pp. 91-93.

¹⁴ エマソンの土地の霊への関心については、拙論「エマソンの詩 "Woodnotes II" と土地の霊 (*Genius Loci*)」、三重大学人文学部文化学科『人文論叢』第 26 号、2009 年、pp.75-84 で論じた。

¹⁵ Ralph Waldo Emerson, *The Later Lectures of Ralph Waldo Emerson 1843-1871*, Vol.I:1843-1854, eds. Ronald A. Bosco & Joel Myerson (Athens, GA: U of Georgia P, 2001), p.298. 以下、この本からの引用は、LL で表わす。

¹⁶ *Collected Poems*, pp. 203-04.

¹⁷ Lawrence Buell, *Emerson* (Cambridge, MA: The Belknap P of Harvard UP, 2003), pp.36-37.